



## 大図研関西 3 地域グループ合同例会

### 終了しました

### Alma 導入の苦労話を聞こう

#### ～体験者が語る導入のポイントとは～

大学図書館では紙中心のサービスから、電子ジャーナルを含む電子コンテンツの取り扱いが増え、既存の図書館システムだけでは管理しきれず、担当者のアイデアと知恵で何とか乗り切っているのが現状だと思います。特に今年度はコロナ禍の関係で急激に電子コンテンツが増えてその苦労は倍増していると思われま

す。そんな中、世界では、紙の図書、雑誌と電子ジャーナル等の購読契約のある電子情報を統合的に管理できるクラウド型図書館システムが登場し次第にシェアを広げています。そして 2019 年 9 月早稲田大学と慶應義塾大学の図書館が共同運用という形で国内初のクラウド型図書館システム Alma の運用を開始しました。

そして、2019 年 10 月には佛教大学図書館が先の Alma の導入を決定し、現在サービスを開始しています。

今回、佛教大学図書館の飯野さんに来ていただき、国内ベンダーが扱っていない図書館システムを導入するという苦労をなぜ選択したのか？ 国内の図書館システムとは異なる苦労も多くあったのでは？そして今後 Alma 等のクラウド型図書館システムの導入を検討するにあたり、何に気を付ければよいかなど語っていただきます。

日 時 : 2021 年 1 月 10 日 (日) 13:00-15:05

会 場 : オンライン (Zoom)

講 師 : 飯野勝則 氏 (佛教大学図書館 専門員)

主 催 : 大学図書館問題研究会関西 3 地域グループ

#### [目 次]

大図研関西 3 地域グループ合同例会 終了しました	…	1
大図研京都ワンディセミナー 「Go to レファレンス～ウィズコロナ時代におけるレファレンスの在り方を再定義してみませんか～」参加報告	渡邊 さよ	… 2
こんな時だからこそ。磨こう、見直そうレファレンス本の紹介 第 10 回『中国のマンガ<連環画>の世界』	長坂 和茂	… 4
会費ご納入のお願い	…	6

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたは URL へお寄せください。

電子メール : [kyoto@daitoken.com](mailto:kyoto@daitoken.com) (大学図書館問題研究会京都地域グループ)

URL : <http://www.daitoken.com/kyoto/index.htm>

**大図研京都ワンディセミナー**  
**「Go to レファレンス～ウィズコロナ時代におけるレファレンスの在り方を再定義してみませんか～」**  
**参加報告**

**こんな時だからこそ。磨こう、見直そうレファレンス**

**渡邊 さよ**

1年ぶりのワンディセミナーが行われたのは2020年11月14日(土)。コロナ禍に対応してオンライン(Zoom)での開催でした。振り返ると、図書館の業務は、対利用者・対資料に直接あたるが多いため、非常に苦戦する1年となりました。そんな中でも学修支援部署として、日常的に行っているレファレンス・サービスが今回のテーマ。館の規模や学部構成に関わらず行っているサービスだけに、興味を持たれた方も多かったのではないのでしょうか。私もワクワクしながら参加させていただきました。すぐ取り入れられそうなTipsの多い第一部を中心に、その一部をご紹介します。

■第一部 リモート環境下でのレファレンス～レファレンス・インタビューのコツ～

1.レファレンス・インタビューをもう一度！

まずは各自の振り返りとして、「学生からのよくある質問『〇〇関係の本はどこにありますか？』に皆さんはどう答えていますか？」という問いかけ、続いて「よくある(よくする)解答例としては『〇階の[分類]番台を見てください』『OPACを検索してみてください』といった感じでしょうか。」とテンプレ的に使われていそうな対応が提示されました。クイックだから即答で？ガイダンスでやったからOPACの検索できるよね？ということだと思います。実際よく交わされるやり取りですね。ここで更なる問いかけ「本当に答えはそれでいいのか？ほかにないのか？あともう一言何か聞いてみることはないか？(考えてみよう)」から、レファレンス・インタビュー自体について深く考えていくこととなります。

つづいて統計データから、情報リテラシー教育実施率ほぼ100%に対し、レファレンス総件数の約半数が所在調査や利用指導、事項調査は総件数の10～20%程度(と数値が提示される)。ということは、実施効果があがっていないのではないかと学生(や教員の)ニーズとあっているのかを振り返る必要がある!! という薄々気づいているが衝撃の事実が導き出されます。学習支援の観点はもちろん図書館サービスの面でも、非効率で改善必須。

ここでおさらいとして、レファレンス・サービスについて、サービスの種類・質問の種類と行う際の心構えが提示されます。その締めくくりとして、3つの心がけること  
 1.声の上げ下げ 2.笑顔 3.(相手の話を聞き入れる)態度を上げ、図書館員にとってはほんの些細なことでも、利用者にとっては大きな支えにもなり、障害にもなると締められました。自分にとっては日常の一コマ、同じ対応の繰り返しでも、相手にとってはただ1回(かもしれない)。忙しくてちょっとぶっきらぼうに言ってしまったとか、実質的な内容としては不十分だったなど気をつけたいですね。

踏まえて、もう一度最初の質問ロールに戻ります。今度は、(開・閉・中立質問のうち)開質問をチョイスして「何か課題が出ているのですか？どんな課題ですか？」(一歩踏み込んで)〇〇の何を調べたいのですか？」といった、学生が本当に知りたいことを導き出せるよう、うまく質問を交えながらちょっと踏み込んで適切な回答を行っていく流れに持っていきました。

ここで重要になるのが「自分が知りたいことと、質問が合っていない学生が多い」ことだと提示されます。学生の言葉の中には、いろいろな思いや考えがあり、いかにそれを汲み取り(本当に)要求する情報を提供できるかを考えながら導き出すことが重要。そして、よりニーズを引き出すため、より良い学習支援を行うためにレファレンス・インタビューが重要になってくる。また(その次の段階として)、学生だけでなく教員とも「目的意識・共通認識のもと、教員と話ができる能力を図書館員が持つこと」が必要とのこと。立場や職場環境など考えると、教員と直接話すのはなかなか難しいですが、突破しなければならない壁のようです。

## 2.レファレンス・カルテの作成(第2部導入としてのお話+α)

今度は、リモート環境下でのレファレンスの難しさとコツについて考えていきます。一番のネックは対面と違う空気感『画面越しの距離感をどうやって埋めるか』のようです。

まずはツールの選定について。優先順位はやはり『学生が使いやすい』だそうです。その項目として、①無料(学校が提供するものも含)、②設定が簡単、③操作が簡単、④あそび心があるが上げられ、特に馴染みの薄い『あそび心があるもの』として GatherTown(<https://gather.town/>)が紹介された。(レトロ RPG 的な空間でなかなか面白そうです)

続いて、レファレンス・サービスの変化について。質問の種類ごとに ①案内：VR(バーチャル)化等に。それにより件数が減ることも期待できる。②即答③調査④探索：デジタルレファレンスに：チャット・HP・メールといった従来のリモート対応にプラスして、オンラインリモート導入により口頭説明できるので文章作成・伝えづらい部分が緩和される。ここで一つ注意なのは、とはいえ「質問の内容が明確になっていない学生にとっては質問することが難しい」ということ。対面時より尋ねづらさのレベルは跳ね上がりそうです。質問内容の確認と明確化が非常に重要になりますね。

対面・非対面の違いを比較すると、距離感や親近感をうまくコントロールすることがカギとなり、安心や信用を得ていくというプロセス自体は変わらないが、画面越しでのその感覚を養う必要性、また資料の提示や説明方法などもオンラインに対応できるよう工夫が必要。いずれにしても、ツールの機能の使い方や画面越しのシュミレーションなど(『ぶっつけ本番』ではなく)十分な準備が必要になるようです。以下、上げられたものをざっと掲載します。

### □インタビュー準備

- ・マイクを通した声の大きさ、高低さ(トーン)、速さ(テンポ)、大きさ、上げ下げ
- ・カメラに向けた視線、どこを見て話すかパソコンに目印をつけるなどの工夫
- ・背景(バーチャルも含む)を使いイメージを和らげる
- ・イヤホンマイクを準備する(ヘッドフォンは見た目がいかついため)
- ・いつでも質問に来てもらえるように常時接続

### □インタビュー中

- ・なるべくマスクは外し顔を見せる
- ・学生の表情も聞き取りの情報になるので、支障がない限り顔出ししてもらう
- ・身振り手振りは、画面を通して見える範囲に納める(ボディランゲージは×)
- ・チャット欄を使い、質問内容の再確認を行う

### □インタビュー後(アフターケア)

- ・受付番号および聞き取りを行った内容をメール等で送る
- ・次回へつなぐための連絡方法などオンラインリモート以外の方法も紹介
- ・問題解決後の学習支援につながるポータルやパスファインダーなどのツール紹介

最後に、コロナ環境下スタートしたサービスではあるが、対面・非対面とも両立した形で継続していくことになるだろう。活用方法の工夫、継続のメリットを予測してうまく業務に組み込んでいく必要がある。今が図書館のPRのチャンスである。学生へのPRだけでなく、大学側への図書館サービスのPRも。新しい図書館の形を目指して頑張らしましょうと締めくくられました。

第二部は、『レファレンスの体系的な構築に向けて～レファレンス・カルテの導入～』。レファレンス・カルテの導入については、検討・実践されたのが個人別カルテの構築ということで、非常にきめ細やかなサービスを目指して取り組まれた内容でした。各館の事情により、このレベルのカルテの即導入は正直難しいと思います。が、カルテ導入試験を行った館のアンケート回答から、試験的にでも導入することにより、自館の持つ問題・課題点の見直しにつながるという意見を見て(利用者教育の内容・実施方法等の再検討、サインの見直しなど)、継続的な実施は難しいかもしれないが、現場担当者の負担にならない範囲で試せたら良いデータが取れそうだと思います。

最後に。講師の矢崎様、企画運営してくださった京都地域グループの皆様、良いお話、良い時間をありがとうございました。

わたなべ さよ (広島経済大学図書館)

---

## 本の紹介 第10回

### 『中国のマンガ<連環画>の世界』

長坂 和茂

---

この図書は、中国に存在する特殊資料「連環画」を紹介するものです。2017年出版で、紹介するにはやや遅いとは考えますが、その後類書が出ておらず、また現在でも書店等で入手可能な図書であるため、本日誌面をお借りして紹介することにします。

さて、「連環画」は本書のタイトルにもある通り、「中国のマンガ」ともいわれる資料で、主に1ページに1枚の絵と説明文で構成された横長の冊子というスタイルが一般的な形態となっています。このため、日本人が見た場合マンガというよりも、小型の絵本というイメージを抱くのではないかと思います。

本書の構成は以下の通りです。

はじめに

1. 絵とともに語られるはなしの系譜
2. 連環図画の誕生 — 中華民国 (一九一二～四九)
3. 混乱から改良、そして隆盛 — 中華人民共和国建国初期 (一九五〇～六〇年代前半)
4. 闘争する<小人>たち — 文化大革命時期 (一九六六～七六)

5. いまひとたびのご奉公 ―文革終熄後（一九七〇年代末～一九八五）
  6. 大河からせせらぎへ ―連環画の衰退（一九八六～二一世紀）
  7. 連環画の様々な<顔> ―そして饒舌な<口>
  8. 日本の読者のための一章
- あとがき／注／参考文献／図版出典

目次からわかる通り、本書は連環画という出版物の発展と変遷を歴史的観点から分析する内容となっています。これはおそらく連環画に関する研究書他にないためであろうと考えます。これは本書あとがきでも「これからなすべきことは、『中国連環画体系』のようなものを編集することであろうか。この本は、いずれそのようなものを作るための布石に過ぎない」と著者が指摘している通りです。特に中華人民共和国成立後の連環画の内容には党・政府の意向が色濃く反映されているので、歴史との関連を無視することはできません。

しかし、本書の中でも大図研京都地域グループのグループ報で紹介する価値が高いのは、何といても第八章「日本の読者のための一章」、その中でも「日本の図書館には連環画があるのか」という段であろうと思われます。この段では、連環画を所蔵している図書館として、国立国会図書館関西館の「上海新華書店旧蔵書」の一部、大阪府立国際児童文学館、京都大学人文科学研究所図書室、滋賀県立大学図書情報センターの「陳コレクション」の4機関が紹介されています。近畿の機関ばかりなのに理由があるのか、偶然なのか気になります。しかし、大学における中国語教育に連環画が使われていたこともあったことから、筆者は「大学の研究室や図書館のかたすみには連環画が埋もれている可能性が高い」と指摘しています。実際、あとがきによると著者自身も中国語の授業で連環画を読んだのが、連環画との出会いだったとのこと。

評者は本書の出版前 2015 年の大学図書館問題研究会第 46 回全国大会（札幌大会）において筆者を講師とした自主企画「中国のマンガ：連環画の研究最前線」を開催したことがあります。大図研の大会でこういった自主企画を開催した目的は、組織的な保管をしなければこういった通俗的な図書はすぐに散逸してしまうことから、こういった資料の存在を図書館員が知っておくことにはメリットがあると考えたからです。

連環画に限らず世に存在する様々な特殊資料の閲覧環境・保存環境改善に対して、図書館が貢献できる部分がないかについては常に考えていく必要があると思います。本書を紹介したことがその一助となれば幸いです。

-----  
 武田雅哉著『中国のマンガ<連環画>の世界』  
 平凡社、2017.2  
 370p 22cm 3,500 円（税別）  
 ISBN978-4-582-48222-5  
 -----

ながさか かずしげ（京都大学桂図書館）

◇ 会費ご納入のお願い ◇

会員のみなさまにおかれましてはご健勝のことと存じます。

2016/2017年度(2016年7月～2017年6月)より、大学図書館問題研究会会費は、すべての会員の皆さまに、直接大学図書館問題研究会事務局へご納入いただくこととなりました。

一括徴収方式に移行し、5年目となりますが、京都地域グループは年度継続の前に会費をご納入いただく前納があまり進んでいない状況でございます。ワンデイセミナーやグループ報は京都地域グループ費により開催・発行させていただいております。ご多忙のところ大変恐縮ですが、会費のご納入のほどよろしく願いいたします。

**会費は、¥7,000(大図研会費：¥5,000+京都地域グループ費：¥2,000)/年度です。**

**【振込先】**

郵便局 00190-2-79769 大学図書館問題研究会

■銀行名 ゆうちょ銀行 ■金融機関コード 9900 ■店番 019  
■預金種目 当座 ■店名 〇一九(ゼロイチキュー店) ■口座番号 0079769

ご不明な点は大学図書館問題研究会事務局(会費担当)(kaihi@daitoken.com)までご連絡ください。

※ 学生会員制度(試行)として、学生の方には特典をお渡ししております。

詳細は京都地域グループ Web サイトの「学生会員制度の試行について」をご覧ください。